

## 近代化の歴史地理学序説

坪内庄次

## 一 緒言

## 二 歴史の地理学

## 三 歴史法則と地域性

## 四 近代化の意義とその理想型

## 五 近代化の分析指標

## 六 濃尾農村近代化の地域性―(結語に代えて)―

## 一 諸言

筆者はさきに、日本地理学会一九五六年度春季学術大会（於法政大学）において、『濃尾農村近代化の歴史地理学的展望』と題して研究発表したことがあった。その際、研究の目的として述べたところは次の如きものである。

「茲に近代化の歴史地理学と銘うった理由は、歴史地理学なるものを、単なる過去の景観の復原という立場においてではなく、又、景観変遷史的立場というのでもなく、歴史的發展の仕方の地域差（変動して行くものの変動の仕方の差による地域性把握）の分析に志向すべきではないかという方法的見解に基く。このような方法的な前提に導か

れて、近代化というすぐれて歴史的な発展方向が、濃尾農村の場合、他の諸地域、例えば近畿関東東北等に対比して、如何なる地域的特色をもって位置づけられるか、更に又、濃尾の範囲内においても、その地域差は如何に具現されるかについて分析を進めたい」。

本稿は、右に述べた如きアプローチによる歴史地理学への方法論的序説である。なお、筆者の右の学会における発表に際しては、数氏の方から次の如き批判と賛同の闊陳を得たと記憶する。本稿はその批判に対する応えでもあり、又、賛同に励まされての大胆なる意見の再披瀝でもある。ここに併せ附記して今後の研究の教導としたい。

- (1) 歴史地理学方法論上の、そのような見解は、既に学界において考慮され、認められていると考えて差し支えない。
- (2) 近代化の意義について、よく吟味検討すべきでないか。
- (3) 歴史的発展の地域差究明は結構だとしても、発表者の現在のやり方は、ややもすれば表面的平面的に流れる惧れがあるから、寧ろ局所的に深くボーリングすべきである。

## 二 歴史の地理学

歴史地理学を如何に考えるかは、基本的前提として、歴史学と地理学とを如何に考えるかにかかっている。

では歴史とは何ぞやといえ、**「歴史とはいちおう、昔のじできごとだといふことができよう。昔とは時間の上の觀念であり、生活上の体験である。……ところで歴史という言葉には、もう一つの意味がある。それはそのようなできごとに関する知識をさすことである」**。又、「時間の中にあるという点では、人間も動物も植物も同じだといえるかも

知れない。……しかし、今日一般に歴史という時はもっぱら人間の過去であつて、それ以外のものを含まないのが通例であるとされる。」<sup>(註一)</sup>

ところが、地史といい、地球の歴史といい、又は自然史<sup>II</sup>博物学 (Natural History) というとき、その歴史とは、もっと広義の、ある意味では通俗的な、しかし寧ろすなをな概念として受けとれるものを意味している。ここにすなをであるとは、人間にのみ局限して、あまりにも専門化し、深化し、純化したと思ふとき、実は特殊迷路に彷徨して、歪曲されざる大道の方向を誤る懼れなしとしないからである。人間の歴史がすぐれて人間的に把握されねばならない事は申すまでもないが、若し自然の歴史が存するるとすれば、それが専ら自然的に把握されねばならない事も亦当然であろう。唯、人間と自然とを共通の地盤に置くとき、歴史学の概念の中には、「時間的な継起発展」という公約数が残り、時間科学としての歴史学が構成せられると言ひ得よう。

地理学の場合においても亦同様であろう。即ち、「人文地理学」といい、進みては「社会科学としての地理学」というとき、それは専門化し、深化し、純化した場合であつて、その際の人文地理学が、すぐれて人間的に研究把握されなければならない事は申すまでもない。しかし、我々がひるがえつて「自然地理学」というとき、人間と自然とを共通の地盤に置いた上での「空間的な展開の多様性<sup>II</sup>地域差」という公約数が残り、かくてヘットナー教授に随つて「地表上における空間的秩序に関する科学」乃至は「地表のコロロギー的科學」<sup>(註二)</sup>としての地理学を構成する事が出来るのである。

では次に、右の如き歴史科学と地理科学とを結合せしめて、如何に歴史地理学なるものが構成せられるか。事柄は簡単である。歴史地理学とは、例えば経済地理学が経済現象を地理学的に把握するものであるのと同様に、「歴史を

地理学的に把握するものであると同様に、「歴史地理学的に把握する」のである。即ち、凡ゆる地球上の現象は時間的な継起発展を示すが、その歴史的發展の仕方が地域差をもつ、そのような歴史の地域性認識へのアプローチが歴史地理学を構成するのである。この逆に、地理を歴史学的なアプローチにおいて把握する仕方も亦存在しよう。即ちそれは「地域史」であり、所謂普通にいる地方史あるいは郷土史といわれる分野は、実はそのような仕方においてこそ考究さるべき筈のものであるとも言い得よう。即ち、普通に所謂地方史といひ郷土史といわれるものが、果して右の如き「地域の歴史」としての構成と内容を有するかどうかは疑問の存するところであり、我々として不満の感ぜられる点も存するのであるが、概念規定の上からは、まさにそうであるべき筋合のものである。

ところで、ここで想起されるのは、歴史地理学の概念規定として普及されている「過去の景観の復原」乃至は「景観変遷史」という立場である<sup>註3</sup>。歴史地理学を規定して単なる過去の景観の復原というとき、我々としても疑問の持たれる点の一つは、過去とは何かということ、特に過去の限界設定に関する点である。即ち、例えば日本史についていえば、過去とは明治維新以前を言うのか、あるいは又明治時代は過去でないのか、大正・昭和と、歴史学における現代史はどうなるのかというが如く、過去とは一体どの時点において劃期すべきかという異論の成立である。この点に関する限り、我々はヘットナー教授における「時間の切断面理論」に追隨的であり得ない。<sup>註4</sup>しからば次に、それより更に進みて景観変遷史というとき、変遷史とは文字通り正に変遷史であつて、それは歴史学的方法論的範疇に属するのでないか。景観をより厚みをもった嚴密な意味での「景域」<sup>註5</sup>と解するのが正当であるとしても、しかれば景観変遷史とは前述の意味における「地域史」に外ならず、地理を歴史学的なアプローチにおいて把握する地理学的な歴史学であると言い得よう。

### 三 歴史法則と地域性

筆者は嘗て、次の如く論じた事がある。(註6)

地理学的認識の究極の目標は何かといえややはり「地域」であろう。ここに現代地理学界の主流があると思われる。ところで、「地域差」といい、「地域性」というとき、それは諸々の条件の組み合わさった結果の、地的に渾一された、他の地域とは代置できない、その地域の個性についてである。しからば普遍性といい一般性という、あるいは地理学的法則という概念とは、全く相対立する名辞ではないか。

方法分化的に科学を分類するとき、法則科学なりや記述科学なりやは、地理学方法論における基本的問題点の一つとなり得るであろうと思う。ところで、凡そ法則とは实在具体の中から抽象化に抽象化を重ねて共通なるものをぬき出し、それを反復生起するものとして取扱うが故に、時空を超越する筈のものである。例えば、自然科学における「落下の法則」は、古代においても現代においても、又日本においても米国においても適用される。これこそ正に普遍的法則である。これに反して記述は事象の存在を離れない。この意味において地域（空間）を離れない地理学は、時代時間を離れない歴史学と共に、記述科学に位置づけられねばならないようである。唯、地理的事象の何故に成立するかを説明し理解するためには、二つ乃至三つの地域の地域的対比のみでは未だ第一次的初步的たるを免れず、終極的にはより一般的普遍的なるものの知識を借らなければならぬという要請を持つものと思われるのである。ここで法則なる用語をうち棄てて、マックス・ウェーバー流の「理想型」(註7)の概念を借用し、それを手段とし写鏡とし

て、地域性を認識すべきではないかとするのが、筆者の学生諸君に対する平常の論法である。しかし、理想型は如何にして把握するか。やはり抽象化の所産であり、抽出された結果を法則と呼ぼうが、理想型と呼ぼうが、將た又傾向とか蓋然とかの言葉で呼ぼうが、やはり具体より抽象への所産に外ならない。但し、いづれでもあれそのような一般のな尺度に照らしてこそ、始めて眞の個性が浮彫りにされる筈である。地理学的認識にも、バックボーンとしてそのようなものが欲しいのである。法則か個性かは、凡そ學問が、断片ならぬところの統一をもつ知識であるがための、盾の両面ではないであらうか。自然科学においては法則が重要な地位を占める事はいうまでもないが、それに関する記述も亦重要な意義を持つ。物は落ちる落下の法則。しかし羽毛は舞い上る。羽毛の実態(個性)は、落下の法則のみでは如何とも把握されないが、落下の法則に照らして考慮して始めて、空氣の抵抗や構造上の特性に基いて舞い上る、眞なる姿の把握が成就するのである。(註<sup>8</sup>)

では当面の歴史地理学的認識においては、そのような普遍的法則なるものは一体如何なるものであるか。これは、地理学が記述科学であつてみれば、歴史学そのものにおいて定立されているものを借用する外はない。この普遍的なるものの借用は記述科学の宿命である。ところが歴史学そのものが、元來での記述科学であつてみれば、その法則そのものが問題である事はいうまでもない。普遍化が歴史の地盤に止る限りに於いて、法則を求めると至難であり、唯、定型(模型・理想型)のみが求め得らるるであらうという見解が成立する所以である。筆者はここで、このえ方に倣いたいと思う。又、段階法則といい、類型法則といわれるものも、その実は理想型である。しかし、我々は考そのような歴史的継起發展の理想型を本筋とし、物指しとし、写鏡として、それとの偏差を検討して始めて、地域性といわれるものの眞姿に接する事が出来るであらう。

#### 四 近代化の意義と其の理想型

地理学的認識における「史学的見解の透徹」ということは、ブラーシュ以来のものであるとされる<sup>(註9)</sup>。しかしこの事は、ブラーシュにあつてはラッツェルの動物的なるに對して人間的であるという事の別語であつて、必ずしもすぐれて動学的であつたという事と同義ではない。一般に「静学は均衡又は秩序を対象とし、動学は發達又は變動を対象とするものと見られる」。<sup>(註10)</sup>それはコントの社会動學提唱以來の、社会科学における重要叙述法である。が、ブラーシュにあつては歴史の見解の透徹を特色としながらも、歴史は地域性の条件であり、特に人間中心の主体的条件ではあり得ても、叙述の仕方は静学的な色彩が濃いと観るは、果して見当違いであらうか。寧ろ、ラッツェルにおいての方が動学的であり、唯、ラッツェルにあつては人間性が見失われ、人間の歴史が單なる出来事の反復生起として、自然に従屬している点が問題なのである。ところで、筆者の上述の意味における歴史地理学においては、すぐれて動学的ならざるを得ない必然性を持つ。例えばここに「近代化」という。それは正に、それ自身において既に、動学的概念であらう。これに關して想起されるのは、最近の地理学界においても、工業化といい、あるいは都市化・商品化・合理化・通勤化等々というが如く、いずれもすぐれて動学的な用語が使用され、その概念規定が問題視され、又研究対象とされる傾向の強い点であつて、地理学が静学より更に進みて動學を開拓しつつあるものとして興味深い。それはある意味においては、嘗てより折にふれ動態的地理などといわれたものの再確認乃至は止揚であるとも言ひ得よう。歴史地理学の叙述は、正に新しい動學的地理学の典型を示すものでありたい。

ではここに「近代化」とは何か。その解釈については人々それぞれにニュアンスがあるものの如く、筆者も亦筆者

なりに独自の見解をとるとすれば、混乱は更に深まる惧れなしとしないから、現状においては、なるべく先学の解釈に依拠しつつ、一応の限定解釈を採ることにとどむるのが穩当のようである。そこで本稿において近代化とは、先ず第一の限定として、社会経済史の分野に限るとしよう。しからは、例えば大塚久雄教授が「近代化の歴史的起点」というとき、其処でいう近代化とは、「近代化」という語は、このごろの「民主化」という語と同様に、ここではある程度漠然たる意味に用いられている。つまり、封建的なものの崩壊と資本主義的なものの成立という厳密な意味での「近代化」のみでなく、そうしたものの歴史的により、高い段階への止揚という事実も亦含まれている」と。註11

右において、厳密な意味での近代化とは、「封建的なものの崩壊と資本主義的なものの成立」ということである。そこで本稿における近代化とは、第二の限定として、「そうしたものの歴史的により高い段階への止揚」という概念を除去しよう。何となれば、より高い段階への止揚とは、近代的なるものがより高度化するというだけであって、近代化という用語の厳密な意味からは外れるであろうからである。つまり、凡そ「〇〇化」というとき、それは「ある固定せる理想像」があり、それになる過程の謂である。固定せる理想像に一〇〇パーセントなつてしまえば、「〇〇化」はそれで終了する。後は高度化があり、深化があり、分化・純化等が考えられるが、それは理想そのものの性格を反映して無限に尽きるところがない。逆に複雑化退化も考えられよう。あるいは又、その段階では既に別なものへの「〇〇化」が進行しつつあるかもしれない。例えば、近代化（資本主義化）についていえば、その高度化するところ、マルクス学派に言わしむれば、既に共産化（社会主義化）が進みつつあるかもしれないのである。

そこで、近代化の概念規定には、資本主義社会の固有の固定せる理想像が必要である。しからは、「資本主義は、いうまでもなく、歴史的に規定されている生産体系の構造であるから、単なる商品生産流通と同一でもなければ、貨

幣經濟一般でもない。……世界史の一段階的形態としての資本主義が他の社会構成から特徴付けられる点は、「自由な」賃労働の存在、而も単なる孤立的・分散的な賃労働の存在ではなく、社会的生産における労働力の一般的基本形態が自由な賃労働であるということ、あるいは、労働力は、一般に、労働者自身にとって彼に属する商品の形態をとって現われているということに求められるであろう。……賃労働及び産業資本が社会的生産の基礎をなしている經濟社会の構成を資本主義と呼ぶ」<sup>(註12)</sup>とするのが一般の略々共通せる解釈であろう。近代化とは、既述の如く社會經濟史の分野に限定すれば、封建的なるものから、右のような資本主義社会に変化する過程の謂である。

では、そのような近代化の過程は、一般に如何なる過程で進行するか。其処に嚴密な意味での發展法則が定立され得ないとすれば、少くとも理想的な型が考えられよう。といへば、読者は恐らく、世界史的にはかの西欧の、特にイギリスにおいて進行した近代化の典型といわれるものに想倒するであろう。紙数の關係上、今ここではその詳細を示す暇はないが、それは嚴密にはイギリス型といわるべきものである。しかし、多数の實驗値をX・Yの座標に投影して、例えば  $y = \frac{1}{2}x^2$  の相関線が引かれたとして、理論的な類推の上からも、イギリスの場合はその直線上に乗ると観るのである。

人あるいは右のような仕方は、歴史学者の採る方法と、何等異るところがないと言うであろう。しかし、地域的な取扱いの仕方において、歴史家と地理家との兩者間には、相當な開きが生ずるであろうと共に、歴史家が研究するから地理学的認識でないというが如き筋合のものではない。例えば、歴史家である筈の古島敏雄教授が、「幕藩体制成立期における農村構造の地域性」<sup>(註13)</sup>というとき、我々はその地理学的見解の透徹に、地理家側としての共感を感じるのであって、それは唯筆者のみであろうか。

## 五 近代化の分析指標

以上述べた如く、近代化の意義が確定し、更にその理想型が定立されるれば、我々はそれに照らして、それを物指しとし写鏡として、地域性の認識に入る事が出来よう。進みて言えば、理想型はある意味においては平均値であり法則ではないのであるから、ある地域、又はある時代にのみ適用されるものが定立される場合があつて決して差し支えない。具体的研究に当つては、恰も尺貫法で測るか、メートル法で測るか、あるいは又秤で測るか種で測るか等々の如く、物指しの質とスケールの相違は当然にあつてしかるべきであらう。又、未だ理想型の定立出来ない研究段階にあつては、恰も数個のものの軽重・広狭・深淺等を比ぶるだけに終るが如き場合もないわけではない。地理学における第一次的・初歩的な地域対比が正にそれである。

ところで、近代化の地域性を認識するための一般的物指し（理想型）が定立されたとして、では次に、それによつて何を測定すべきか。恰も、ある物体の性格を知らんとして、長さを測るか、体積か重量か……といった如く、そのものの性格を浮彫りにするが如き指標が必要である。与えられた紙数に限りがあるのでここでは縷々述べる余裕はないが、近代化の分析指標としては、いうまでもなく、大別して次の二つが採用されることは周知の通りである。筆者も亦これに倣いたいと思う。

## (1) 商品貨幣経済の滲透状況。

これは商品作物の栽培状況・金肥の使用状況・市場構造の状況・農閑余業Ⅱ兼業構造の状況・農村工業の状況等の分析を通じて把握される。

## (2) 農民の分解状況。

これは商品貨幣経済の滲透による結果的現象であるが、総合的指標としての意義を持つものと考えられる。

## 六 近世濃尾農村近代化の地域性

——(結話に代えて)——

筆者は、以上述べて来た如き歴史地理学に対する筆者なりの方法論的前提に導かれて、濃尾農村の研究を手がけて来た。但し、実はそれは、濃尾農村人口研究のためのものであって、正しくは「濃尾農村人口現象の歴史地理学的研究」といった程のものであり、得られた成果も、筆者の浅学の故を以て、自ら省みても恥ずかしい程度のものであるが、敢て本稿の結語に代えて、唯今までに得られた結果から、近世濃尾農村近代化の地域性に関する限りについて、一応の展望を与うれば凡そ次の如くである。

(1) 先ず総括的に言えば、位置地形気候等、自然地理学上の特性はいわずもがな、凡ゆる地域的現象が、大局的に観て、この地域では西南日本と東北日本との中間漸移地域又は廻廊地域としての特性を持つものの如く、近代化の様相も亦近畿の先進性と関東東北の後進性に対し、中間性を示す。

(2) 商品貨幣経済の滲透状況について、例えば商業的農業の展開の仕方を観れば、この平野は畿内を核心とする棉作と、関東東北に盛行して行った養蚕との中間競合地域としての特色を持ち、就中、一般的に先進的と観られる棉作と雖も、畑地棉作率の示すところは、局所的には畿内に接近する程の高度な村があつても、それは極く限られた範圍についてである。他の分析指標の示すところも亦右に類似する。頁(14)・(15)

(3) 農民の分解状況について、先ず無高（水呑）率の示すところは、東北の前近世的遺制によるものと思われるものは例外として、畿内の驚くべき高率と関東の低率が注目され、濃尾はその中間性を示す。而うして幕末においては、濃尾は近畿段階へと、急激に追いついて行くが如くに展望せられる。

(4) 更に百姓持高別階層構成について検討すれば、分解状況はやはり近畿の先進性と関東の後進性に対する中間性である。

(5) 要するに近世濃尾農村近代化の地域性は、近畿の先進性と、関東東北の後進性に対する中間性であり、これを地域に落して言えば、その展開の仕方は、近畿の「面的」、関東・東北の「点的」に対し、濃尾は「線的」な展開を示しつつ幕末に到ったものと展望せられる。

(6) 濃尾の範囲内における地域差は、例えば野菜・棉・養蚕等の特産地の成立が認められるものの、農民分解は概して山間部において低位、平野部において高位、特に主要街道筋における高位性（近代化の線的展開）が注目せられる。但し、無高率の示すところは、低湿地干拓新田地域においては一〇〇パーセントの村も存在し、その特殊性に基く例外を示している。

（一九五八年一月九日稿了）

（註）

- (1) 肥後和男『歴史について』五十八頁。昭和二十六年 富山房。
- (2) 飯本信之『地理学史』新地理講座第二巻地理学本質論、一四二頁―一四三頁。昭和三十年 朝倉書店。
- (3) 藤岡謙二郎『歴史地理学総説』新地理講座第七巻歴史地理、一頁―三一頁。昭和三十一年 朝倉書店。
- (4) 飯本信之 前掲『地理学史』一四七頁。

- (5) 飯本 信之 同右、八四頁。
- (6) 拙稿 『地理学及地理教育における若干の基本的問題点』愛知学芸大地理学報告 地理教育特輯号 昭和三十年
- (7) マックス・ウェーバー 『社会科学方法論』岩波文庫版。
- (8) この辺の記述は次の書に負うところが多い。
- 高田 保馬 『社会科学通論』昭和二十五年、有斐閣。
- (9) 飯塚 浩二 『地理学批判』一五三頁。昭和二十三年 帝国書院。
- (10) 高田 保馬 前掲『社会科学通論』八八頁。
- (11) 大塚 久雄 『近代化の歴史的起点』一頁。昭和二十三年 学生書房。
- (12) 高橋 幸八郎 『近代資本主義の成立』三頁―四頁。昭和二十八年 東京大学出版会。
- (13) 古島 敏雄 『農村構造の歴史的展開』日本歴史講座第四卷中世篇(二)、一二二頁―一二六頁。昭和二十七年河出書房。
- (14) 拙稿 『濃尾平野に於ける徳川時代の商品貨幣経済の滲透』(濃尾農村人口研究第二報)、愛知学芸大学地理学報告第四号、昭和二十八年。
- (15) 拙稿 『濃尾農村近代化の地域性―濃州中島郡東加賀野井村の場合―』(濃尾農村人口研究第六報)、愛知学芸大学研究報告第八輯、近刊。